

工事現場は古環境情報の宝庫

主任学芸員(層序学)
里口 保文



人間活動が今ほど活発でなかった時代や人がいなかった時代でも、自然環境は変化してきました。その変化は大きくかつ非常にゆっくりなために、人の一生の間にはその変化がわからないことが多いのです。そのため、非常に長い期間にわたって環境情報を残し続けてきた地層を調べると、その変化が理解できます。私はそんな長期にわたる昔の自然環境の変化などについて調べています。

地層は非常に分布が狭いものでも、博物館に置くにはちょっと大きすぎるので、博物館で展示をしたり、保存するときには一部分だけを切り取って来たりします。でも、情報がいっぱい詰まっている本当の地層は野外にあるので、外へ出かけて行って研究を



します。地層を見るにはそれが露出している崖を観察しますが、大規模な崖は道路工事などで出てくることが多いので、そういう崖は工事の人をお願いして、危なくない時に見せてもらいます。だから、工事で崖が出ていると聞けば“飛んでいって調査を!”と言いたいところですが、現在のその土地の環境変化は私の行動がゆっくりなので見過ごしてしまいがちになります。

情報の宝庫とはいえ、工事現場は危ないですし、みなさんは無断で見に行ったり、現場の人に迷惑にならないようにしてくださいね。

私と琵琶湖博物館のかかわりは、開館前の準備室時代にさかのぼります。博物館が開館に向けて、ビデオ映像資料作成を映像作成会社に委託された時、私は県内の撮影現場における現地案内コーディネーターをさせていたのだいたいが始まりです。約1年かけ、溜池や田んぼの生き物を中心に2本の映像資料が出来上がりました。その後、滋賀溜池研

究会の溜池調査が全体的に始まり、その一員として調査に協力させていただきました。いただいたのに引き続き、博物館からの委託を受けた蜻蛉研究会が滋賀県のトンボ調査を1993年から1995年にかけて実施しましたが、その調査にも関わりました。

その成果として開催された博物館企画展示「近江はトンボの宝庫」(1998年7月~9月)のお手伝いもさせていただきました。ただきました。今回のギャラリー展示「タガベエのため池探検」についても、ため池保全委員の立場として協力させていただきました。私個人としては、1990年頃、ため池にかかわってから滋賀県内のトンボの生態写真の撮影を続けております。紹介する写真は成虫で越冬するトンボで、鳥に食べられないように枯れ枝に擬態して越冬



宇曾川水系を見守る会 世話人 澤田弘行
するホソミオツネント
ンボです。

こんにちは! 展示交流員です。



琵琶湖博物館のC展示室は、「湖の環境と人びとの暮らし」をテーマにして多様な展示が楽しめる空間になっています。今日は隠れた見どころを交流員さんに紹介してもらいましょう。

取れたての野菜やトク箱ならば「沖島の伝統食」の



多様な沖島の食材

私たちは、琵琶湖博物館の案内だけでなく、展示を通してみなさんと交流し、みなさんに身近な自然や生活へ目を向けていただく『かけはし』となっています。どうぞお気軽にお声をかけてください。



伝統食に話が弾む
コーナーは、年配のかたに人気がありそうですね。

このコーナーでは、琵琶湖のなかでただ一つ、人が暮らす「沖島」での昭和30年前後の食事と食材を再現しています。伝統食は、それぞれの地方における自然環境の違いが反映されていて、面白い話

がたくさんうかがえます。

同じような料理でも、地方によって呼び方が違っていき、特に食材となる魚の呼び方の多様さには驚かされます。

「まわる琵琶湖」とも呼ばれる「回転実験室」は子ども達に大人気のスポットのようですね。

ノリがいいグループでは私たちも楽しく解説ができますが、「実験室」と聞いただけで少し身構えてしまう来館者の中には、最初の「地球は一日に何回転しますか?」という問いかけに、返事が返ってこずにごちらがあせってしまうこともあります。

まっすぐジャンプしても斜めに飛んでしまったり。相手めがけて投げたボールが横にそれ

てしまう?この体験をとおして「コリオリの力」という難しい理論を理解する手助けができるのですね。

この実験室は一見楽しそうですが、一日5~6回も来館者の方と一っしょに回転体験をすると目が回ってしまい、まっすぐ歩くことができなくなることもあります。



ななめに飛ぶボール



ジャンプに挑戦